姫君よ、殺戮の海を渡れ

浦 賀 和 宏

幻冬舎文庫

姫君よ、殺戮の海を渡れ

1

幼い頃、雪が降り積もった日、俺は大はしゃぎで外に飛び出し、小さな雪つぶてをコロコロと地面の上で転がした。雪つぶてはやがて大きな雪の玉になり、俺は夢中で雪だるまを作った。その雪だるまが俺の人生だとしたら、最初の雪つぶては妹の理奈だった。

どんなものにも最初のきっかけがある。そしてどんなものにも終わりがある。自分の人生に未練はない。だが、せめてあの愛らしい姪っ子がどんな人生を送るのかもう少しだけ見届けたかった。それだけは心残りに思う。

理奈――五歳下の俺の妹。

何故、俺の方が先にこの世に生まれ出たのに、理奈が糖尿病を患ったのかは分からない。糖尿病についてはまだ未知の部分が少なくなく世界中の医者が今尚研究を続けている。多分、その疑問についての決定的な解答は分からないままだろう。ただ俺は、自分が目に見えない偶然と必然に導かれてこんな結末を迎えたのも、何かの思し召しではなかったのかと、今ではそんなふうに思うのだ。

理奈が糖尿病でなかったら、俺がこんな、冷たく、暗い海の底で死ぬこともなかったはず

だ。でも構わない。生物は海から生まれたというのならば、俺も生まれた場所に還（かえ）るのかもしれない。そう思えば怖くない。終わりも始まりも、同じなのだから。

　父さんも理奈と同じように、糖尿病で日に何度もインスリンの注射を打っていた。そして俺が中学を卒業したのと時を同じくして、合併症の心筋梗塞で死んだ。糖尿病患者は平均寿命が健康な人間よりも十年短いというデータもあるというが、しかし享年四十五歳というのは、やはり早すぎるのは間違いないだろう。

　心筋梗塞の原因は動脈硬化だ。血糖値が高いとコレステロールの塊が血管内に付着しやすくなり、結果、血管が狭くなり、血栓が作られ、脳梗塞や心筋梗塞を引き起こす。父の遺影の前で、もっと血糖値の管理をしっかりさせておけば、と泣いていた母さんの姿は今でもこの目に焼き付いている。

　糖尿病は遺伝の要素も少なからず関係しているという。父さんと理奈の場合は、食事や生活習慣等で誰でも発病する可能性がある２型の糖尿病ではなく、免疫系の異常によって発病する１型の糖尿病だから尚更（なおさら）だ。そして１型の糖尿病患者は日本人では少ないという事実を知った俺は、どうして俺の家族だけがインスリンを手放せない生活を余儀なくされなければならないのか、と父さんを責めた。父さんが糖尿病だから、理奈も同じ病気を持って生まれ

たんだと。父さんは寂しそうに笑い、母さんは俺を平手で殴った。理奈本人は、何故俺が父さんを責めているのか理解できないような、きょとんとした顔をしていた。その無垢(むく)な理奈の顔が、余計に哀れを誘った。

父さんが死んで暫(しばら)くは、何故あんなことを言ってしまったのだろうと、自分を責める日が続いたけれど。

理奈も小学校に入ってからは、自分でインスリンを打つことを余儀なくされた。技術の進歩で昔に比べて患者の負担も少ないというが、昔ながらの注射器がペン型のカートリッジに形を変えたとしても、自分の身体(からだ)に針を刺すことには変わりない。また血糖値を測ることも理奈には負担だったはずだ。やはり採血のために指先に針を刺さなければならないからだ。

もちろん学校でもインスリンの注射や血糖値の測定を怠ってはならない。子供は残酷だ。毎日学校で注射をしている子のことをどう思うだろう。そして理奈は常にキャンディを持ち歩いていた。インスリンが効きすぎて血糖値が下がってしまうことがままあるからだ。血糖値を上げるグルカゴンという注射もあるのだがインスリンに比べて一般的ではないので、低血糖になった場合は、大抵は何か食べることで対処する。簡単に糖分が摂(と)れる菓子などはうってつけだ。

学校への菓子持ち込みは禁止されているのに、理奈は特別に許されている。学校でキャン

ディを舐めている理奈を、快く思わない子もいただろう。逆に血糖値が上がっている時は、皆が美味しそうに菓子を食べていても、理奈は決してその輪に入ることができないのに。

そういう無理解もあり、理奈は学校で好奇の目で見られる対象だった。もちろん理奈がどんな学校生活を送っていたかは実際のところは分からない。しかし、偶然街で理奈の同級生の男子と遭遇した時の連中の理奈に向ける嘲りの声は、今でも耳に焼き付いている。

俺が中学二年生で、理奈が小学三年生だった時だ。俺たちはスーパーに買い物に行くために地元の町を歩いていた。俺たちは周囲の人にはとても仲の良い兄妹に見えただろう。髪の毛が同じように癖毛だったことから、良く似たもの兄妹だと親戚たちから冷やかされた。母は直毛だったが、父は癖毛だったので、やはり俺と理奈は父の遺伝子を多く受け継いだに違いない。理奈はその癖毛がコンプレックスだったようだが、カールしたショートヘアーは良く似合っていた。

その買い物の途中で四、五人の小学生男子と出くわした。全員初めて見る連中だった。普通だったらからかいの対象は、その癖毛なのだろうが、理奈には当然、癖毛よりももっと珍しい属性があった。彼らは理奈を見るなり、その属性を容赦なくあざ笑い、指を差して囃し立てた。

「うわっ！　糖尿病だ！　糖尿病が歩いてる！」

「糖尿病！　糖尿病！」

俺は頭に血が上り、その男子共を全員殴り飛ばした。そのせいで、母はそいつらの家に頭を下げて回るはめになった。そんなことは止(や)めろと俺は言ったが、母は聞き入れず目に涙を浮かべて家を出ていった。謝りにいったのではなく、連中の親にどうか警察沙汰にしないでくれと頼みにいったことを知ったのは、大分後のことだった。

当時はまだ存命だった父は、もちろん俺の行動を褒め称(たた)えはしないものの、俺を強く叱ったり、連中への謝罪を強制したりはしなかった。理奈と同じように子供の頃から糖尿病と闘っていた父には、俺の気持ちが良く分かったのだろう。

だけど当事者の理奈は違った。

「お兄ちゃんがそんなことをすると、余計に馬鹿にされるのに！」

そう言って理奈は怒った。理不尽だった。俺は理奈を助けてやったのに。でも今では理奈の憤りも理解できる。そうやって一時の感情で理奈を傷つける連中を殴っても、ずっと理奈を守り続けることなどできないのだから。理奈には理奈なりの、自分の人生を生きるための術(すべ)がある。しかし、まだ未熟だった当時の俺にはそのことが理解できず、この事件は、俺と理奈の間にわだかまりとして長らく残った。

そして父が死に、俺は高校に進学した。理奈も表面上は学校で上手(うま)くやっているように見

えた。母は理奈の成長ぶりをことさらに喜んでいた。俺が中学校を卒業しようと、高校に入学しようと、そっけないものだったのに、などとは言うまい。理奈は持病を抱えているのだから。誕生日ごと、学校の年度ごとに母が大げさに喜ぶ気持ちは良く分かった。俺だって自分のこと以上に喜んだのだから。

小児糖尿病患者はやはり絶対数が多くないから皆、理奈のように周囲から奇異の目で見られたり、何故自分だけがこんな病気にかかったのだろう、という悩みを抱えたりすることが少なくない。そこで多くの糖尿病の子供たちが、糖尿病協会や各種医療機関が主催するサマーキャンプに参加している。海や山に行き、患者同士で交流を深め糖尿病について学ぶのだ。

理奈が最初にサマーキャンプに参加した小学二年生の時、子供が海や山などに行ったら我を忘れて遊び回って危険なのではないか、と俺は心配した。事故や怪我(けが)が怖いのではない。人間は運動すると血糖値が下がるものだ。毎日、血糖値を下げるためインスリンを打っている理奈にとって低血糖は致命的だ。

しかし、キャンプから帰ってきた理奈の晴れやかな顔を見ると俺は自分の考えを改めざるを得なかった。血糖値が下がるから運動をするななどと言ったら何もできなくなるし、また急な血糖値の変動に自分で対応できるようにすることも、キャンプの目的の一つなのだろう。付き添っている大人たちもその道の専門家ばかりなのだ。俺が心配する問題ではなかった。

二年生、三年生、四年生、理奈は元気にサマーキャンプに出かけていった。理奈が五年生になる前の春休みに父さんが亡くなり、もちろん理奈は父さんの葬式で涙を流したけれど、その年もキャンプに出かけ、そして少し元気になって帰ってきた。四回もキャンプに出かけていれば友達もできるだろうし、向こうのスタッフとも顔なじみにもなるだろう。理奈が、俺たち家族とも、学校とも違う、第三のコミュニティのメンバーでもあることに俺は気付き始めていた。俺は理奈がキャンプでどんな人間と付き合っているのかまるで知らない。学校などよりも、糖尿病という共通項で結ばれたキャンプの方がよほど楽しいことは想像に難くなかった。理奈が俺の知らないところで、知らない人間と仲良くしていることは面白くなかったが、理奈だっていつかは恋人を作り、結婚をする。いつまでも俺が守ってやることはできないのだ。

だが、そんな第三のコミュニティを、理奈が初めて拒絶したのは、六年生になり、五回目のキャンプから帰ってきたある夏の日の午後だった。

玄関のドアが開く音がした。理奈が帰ってきたのだろうかと思ったが、同時に異変を感じた。キャンプから帰ってきた理奈は、必ず、ただいまー！　と元気な声で帰宅を告げるのが常だったからだ。

しかしその時は違った。ペタペタという廊下を歩く足音に続いて、部屋のドアの開閉する

音が聞こえた。やはり理奈だ。だが何も言わずに部屋に直行するなんて、この元気のなさはどういうことだろう。

「お帰りなさい」

母さんも俺と同じ不安を感じたのだろう。少しだけ早足で理奈の部屋に向かった。暫くすると、理奈の部屋から理奈と母さんが口論する声が聞こえてきた。俺も自分の部屋から出て理奈の様子を見に行った。ドアに遮られて二人の言い争いの声は良く聞こえなかったけれど、キャンプで何かあったのはどうやら確かなようだった。

俺も中に入ろうかどうしようか迷っていると、ドアが開いて母さんが部屋から出てきた。

「——敦士(あつし)」

まるでそこに俺がいることなど思いもしなかったように、母さんはそう呟(つぶや)いた。何だか盗み聞きをしていたようでバツが悪かった。

「理奈、どうしたの？」

と俺は訊(き)いた。

「もうキャンプに行きたくないって言うのよ」

困惑したように母さんは言った。二年生の時から理奈は毎年キャンプに参加している。キャンプが終わって帰ってきたら、一週間は理奈の川や山での思い出話に付き合わされるのが

恒例だったのだ。

「もうキャンプ五回目だろ。それが今になってどうして？」

「私も訊いたけれど、あの子答えないの。いったい何があったのかしら――」

　母さんは理奈がキャンプに行くことに全面的に賛成していた。やはり病気の子供を持つと、親の心労は計り知れないものがあるのだろう。我が家の場合は、一家の大黒柱を同じ病気で亡くしているのだから尚更だ。

　キャンプには俺と同じ年代の高校生も参加している。そこまで年長になると、児童に糖尿病との付き合い方を教えるお兄さんやお姉さんという役割が強くなる。理奈が毎年キャンプに行けば、親同士の繋（つな）がりもできる。高校生の糖尿病患者の親は、母さんにとっても先輩のようなものだ。今までいろいろ相談に乗ってもらったに違いない。もし、理奈がキャンプに行くのを止めてしまったら、そういう今まで築き上げてきた人間関係が、一度リセットされてしまうのだ。母さんが理奈にキャンプを続けさせたいと思う気持ちも、良く分かった。

　俺はそっとしておいてやろうと思い、すぐには理奈に声をかけなかった。しかし陽（ひ）が落ち、夕食時になっても理奈は部屋から出てこようとしなかった。母さんは慌てふためいた。普通の子供の反抗期だったら放っておくという選択肢もあっただろうが、理奈の場合は血糖値の増減が即、命にかかわる事態になってもおかしくないのだ。

こんな時、父さんだったらどう理奈を宥め賺しただろう。俺は父さんと理奈との記憶に想いを馳せた。きっと同じ病気を抱えている者同士、俺には分からない微妙な感情の機微を分かりあえただろうから。しかしどんなに考えても、父さんが特別な方法で理奈と接していた記憶はなかった。普段は仕事で忙しく、たまの休日に子供たちと遊ぶ、そんなどこにでもいる普通の父親だったのだ。

父さんが子供の教育を母さんに丸投げしていたとは思わない。理奈はそれだけ手のかからない子供だった。どんなに学校で冷やかされても、負けずに毎日明るく生きていた理奈がこんなにふさぎ込むなんて、やはり普通ではなかった。

「理奈」

俺は理奈の部屋のドアをノックした。返事はなかった。

「開けるぞ」

俺は恐る恐るドアを開けた。理奈は電灯もつけずにベッドの上で体育座りをしていた。どうやら泣いているようだった。俺はゆっくり理奈に近づいた。

「どうした？　いったい何があったんだ？」

理奈は答えた。

「――嘘つきだって言われた」

「え？」

「私のこと、嘘つきだって。私はただ本当のことを言っただけなのに」

「理奈――」

「みんなが言った。ほかの子たちも、先生も、お兄さんもお姉さんも、地元の人たちまで、私のこと笑って、終(しま)いには怒られた。そうやって嘘を言いふらすと、他の糖尿病の子供が迷惑するって。糖尿病のせいで嘘つきになったと思われるって――」

「本当にそんなことを言われたのか？」

理奈は頷(うなず)いた。

「そいつらは、理奈の何が嘘つきだって言ったんだ？」

理奈は顔を上げて俺を見つめた。暗闇の中、その二つの瞳は光って輝いて見えた。

しかしすぐに理奈は俺から顔を背けてしまった。

「どうせお兄ちゃんも信じてくれない」

「――母さんにも言っていないのか？」

理奈は頷く。

「話してみろよ。俺は理奈の話がどんなものであっても、頭ごなしに嘘だと言ったりしないから」

「本当？」
「ああ」
俺の言葉に理奈は逡巡するような素振りを見せたものの、やがておもむろにこう言った。
「イルカ――」
「え？」
一瞬、意味が分からなかった。この話の流れに出るような言葉ではないように思った。
「イルカを、見たの――」
「イルカって、あの海を泳いでるイルカか？」
「そうよ」
そう言って理奈は、今度こそ俺の顔を直視した。まるで請うような目だった。俺は理奈のこんな顔を見たことがなかった。
「水族館で、見たのか？」
「水族館なんて、行かない――」
俺も理奈を見つめ返した。
「本で見たのか？　それともテレビか？」
「違う！　本物のイルカを見たの！」

暗闇の中、俺は理奈と見つめ合った。少しの沈黙の後、俺は言った。
「理奈は群馬にキャンプに行ったんだ。群馬県に——海はないよ」
そう俺が言った途端、理奈は金切り声で叫んだ。
「ほらやっぱり信じない！　嘘だと言わないって言ったのに！」
「理奈——誰も嘘だとは言っていないじゃないか」
「嘘だと言わないって言った！　嘘だと言わないって言った！」
理奈は泣き叫び、そのままベッドに突っ伏してしまった。理奈の泣き声を聞いて、慌てたふうに母さんもやって来た。
「ちょっと、どうしたの？」
「お兄ちゃんまで私を嘘つき呼ばわりして！　お兄ちゃんなんて嫌いだ！」
母さんは部屋の電気をつけて、理奈を宥め賺した。しかしまったく効果はないようだった。母さんは目に浮かんだ涙を拭っていた。今まで特に理奈は癇癪なども起こさず手のかからない子供だった。むしろ俺の方が理奈の糖尿病に過剰にデリケートになっていたぐらいだ。でも理奈だって我慢していたのだ。それが今回のことをきっかけに爆発してしまったのだろう。
理奈の話を聞いてやろうと思ったのに、結果的に理奈を泣かせてしまった後ろめたさに耐えられず、部屋を出た。食卓の自分の席に座り、箸置きに置かれている理奈の箸を見つめた。

暫くして母さんが戻ってきた。理奈はいなかった。
「駄目――出てこない」
そう母さんは涙に濡れた目で言った。
「――低血糖かもしれないと思って、血糖値を測ったけど、特に変わりはなかった」
そう母さんは一人呟くように言った。低血糖になると、情緒不安定になったり、怒りっぽくなると言われているのだ。もちろん個人差があり、それによって大きく左右されるが。
せっかく理奈が帰ってきたのに、俺は母さんと二人で寂しい夕食を摂った。理奈の食事は、母さんが部屋に持っていった。
「母さん――イルカって、群馬にいるのかな」
「いるわけないじゃない。海がないんだから。川で見たとか何とか言ってたけど」
「川――」
食後、理奈は自分で食器を下げてきた。まだ目が少し赤かった。料理は半分以上残されていた。俺は理奈に声をかけたかったが何も言ってやれなかった。理奈も俺を無視するようにして自分の部屋に戻った。
結果的に理奈を刺激してしまった後ろめたさから、俺も理奈と同じように自分の部屋に引きこもった。理奈が心配だったが、俺が出ていってもどうにもならないことはさっき証明さ

れてしまった。

横になって天井を見上げると、理奈の言葉が脳裏に渦巻いて止まらなかった。

『イルカを、見たの』

その夜、俺はイルカの夢を見た。

さすがにもう六年生なのだから過保護になることはないと分かっているが、それでも母さんは万が一のことが起きやしないかと、なかなか寝付かれなかったようだ。

理奈の病状が急変するようなことはなかったが、翌朝、小児糖尿病サマーキャンプ事務局から電話が来た。応対したのは母さんだったが、何の電話だったかは後に母さんから聞いた。

電話の主は、小早川（こばやかわ）という社会人のボランティアスタッフだった。理奈が低血糖で倒れ、そのことで皆と口論になって少々問題を起こした。理奈に心の傷を与えなかったか、また中学生になってもキャンプに参加してくれるのか心配になって電話してきたのだという。

心の傷？　与えたさ！　あんなに泣いていたんだから！——もし俺が応対したら、そんなふうに怒鳴りつけていただろう。しかし母は、いたって常識的に小早川と会話をしていた。

理奈はもうキャンプに行きたくないと言っていると母が告げると、あんなくだらないことでせっかく五年も続けたキャンプを止めるなんてあまりにももったいないから理奈を説得し

に家に来るとのことだった。
　ボランティアだというし、向こうは良かれと思ってのことなのだろうが、何となく面白くはなかった。本人が行きたくないと言っているのだから、それでいいのではないか。理奈を嘘つき呼ばわりした連中なのだ。
「小早川さんが来るの⁉　何で⁉」
　理奈は言った。
「キャンプで何があったのか、話してもらうためよ。理奈に訊いてもはっきり言わないし」
「言ったじゃない！　イルカを見たのよ！」
「理奈！」
　母さんは怒鳴った。ああ、こんなふうにキャンプに参加している子供たちや、何人ものスタッフに言われて、理奈はキャンプが嫌になったんだなと俺は思った。
「イルカ、イルカって、そんなものがどこにいるの⁉　いるわけないじゃない、海がないんだから！」
「違う！　川よ！　川で泳いでたの！」
　俺は、瞬間的に多摩（たま）川でイルカが泳いでいる光景を想像した。この家から近い川といえば多摩川だからだ。だがイルカといえば綺麗（きれい）な海で泳いでいるというイメージがある。多摩川